

NYダウ相場
年後半予測

～ギャン理論から見た株式～

ギャンアナリスト 中原 駿

【7の年はどんな年なのか？】

改めてこれまでのNYダウの末尾「7」の年を振り返ってみる。

1937年【下落◎】… 縮小均衡となった37年不況

1947年【上昇△】… 大戦後不況継続(マーシャルプラン)

1957年【下落◎】… アイゼンハワーリセッション

＝鉱山閉鎖が相次ぐ

1967年【上昇◎】… ベトナム戦争激化「黄金の60年代」

1977年【下落◎】… カーター大統領1年目、貿易赤字拡大

1987年【上昇△】… ルーブル合意とブラックマンデー

1997年【上昇◎】… アジア通貨危機も世界は経済拡大

2007年【上昇△】… サブプライムローン危機が徐々に顕在化

「7」の年で年始から15%以上の上昇を見せたのは1967年と1997年のみ。1947年、1987年、2007年の上昇率は各々2.2%、2.3%、6.5%と非常に低かった。

また年初からの上昇が2～3月または8月前後に大きくトップアウト、特に9～10月の下落が非常に大きかった。1987年のブラックマンデーは歴史的であったが1967年、1977年、1997年でもかなりの下落している。新年始値より下げない確率は62.5%だが、10%以上上がる確率は25%に過ぎず、これは米国株式の歴史ではかなり低い方である。逆に下落確率は37.5%。最大の上昇率は1997年の22.4%、最低は1937年の▲32.8%。「7」の年全体での収益の期待値は▲1.73%とマイナスである。

また「6」の年からの上昇がトップアウトすることも印象的。「6」の年の7月または9～10月にスタートした強気相場が、翌年8～10月にトップアウトするのが習性となっている。今回の相場は底こそ1月だが、BREXITの6月末を実質的起点とみなす事も出来るので「6の年から7の年へ」の強気相場波動をなぞっているとも考えられる。

そして過去のパターンから見ると1)「6」の年に始まったラリーは、少なくとも3月、より妥当には8月、非常に強い時で10月まで続く。2)その後は歴史的急落を示現し、10～11月をボトムとして再び上昇する。3)年を通して「いいこい」となる確率が高く、年間の上昇率は高くない、という3点に集約される。端的に言えば「前半の反騰相場に如何に上手に乗るか、更にその後の下落をどう凌ぐか」が勝負になると言えるだろう。

【長期サイクル】

元々ギャン理論は、W.D.ギャン氏が米国株式と米国商品市場のために開発した理論である事から、その独自の理論とともに非常に親和性が高く、また現在でもかなり有効だと考える。

<90年サイクル>

NYダウには有効な90年サイクルが存在。彼はこのサイクルから「スクエア・オブ・90」という価格と時間の均衡チャートを作った。90年サイクルは大不況の1932年にボトムアウトしたと思われる。90年サイクルは1/2の45年サイクル、1/3の30年サイクル、1/4の22.5年サイクル、1/6の15年サイクル、1/8の11.25年サイクルがいずれも重要である。

<72年及び関連サイクル>

72年サイクルはギャン理論の中核でもあるスクエア理論から創出。最も重要なのは $6 \times 6 = 36$ 、 $(6 \times 6) \times 2 = 72$ 、 $(6 \times 2) \times (6 \times 2) = 144$ 。6は安息日である日曜日を除く人間の1週間の活動日故に強力なサイクル。そのスクエアである36を基本に倍の72、その倍の144は最も強力なサイクル。144年は長すぎるので、有効なのは72年。このサイクルも1932年にボトムアウトしたと想定される。72年サイクルは、36年ハーフサイクル、24年1/3サイクル、18年1/4サイクル、12年1/6サイクル、そして9年1/8サイクルが重要になる。

90と72のスクエアから導き出される長期サイクルボトムは、45年サイクル＝1974年12月、次は2019年±9年

36年サイクル＝1974年12月、2010年±6年

18年サイクル＝1974年、1990年10月、2010年±2年

6年サイクル＝1998年8月、2002年2月、2009年3月、(2015年8月)?(5～8年)

以上のサイクル分析から見て、36年、18年サイクルは同時に2009年3月、2015年8月にボトムをつけたものと想定される。

2009年3月に終了した18年サイクルは、内包する第一4年サイクルを2012年11月に完了した。4年サイクルは2年ハーフサイクル2つか、15.5カ月サイクル3つで構成されている。現在、第二4年サイクルの第三位相か、第三4年サイクルの第一位相と想定される。前者の場合、2015年8月の安値を起点にした第三15.5カ月サイクルの18カ月目になる。しかし、トランプショックの昨年11月安値が一たえ日柄が短いとしても4年サイクルボトムであった可能性が高い。これが後者の見方。

従来、最終(第三)15.5カ月サイクルボトムの想定時間帯は2016年12月±3カ月、4年サイクルのボトム想定時間帯が2016年11月±8カ月であったので、2016年11月4日の安値は想定通りとみなす事が出来る。その後の上昇から見ても、2016年11月が4年サイクルのボトムであったと見るべきか。

【週間サイクル】

2年サイクルのハーフサイクルである50週サイクル(±9週、または1年サイクル)は、その半分である25週(20～30週)2つか、17週(13～21週)のプライマリーサイクル(PC)3つで形成。また15.5カ月サイクルが支配的な場合は22.3週(18～27週)サイクル3つで構成される。2015年8月安値以降のサイクルはどうやら3つの22.3週サイクルで形成された模様。新2年サイクル及び新15.5カ月サイクルは第三4年サイクルと同時に2016年11月に始まったとすれば、少なくともその第一PC、より妥当には第二PCまで強気か。第二PCのトップの時間帯は2017年5月～8月。第二PCのボトムの時間帯は2017年9～10月で年の習性とも一致する。また新15.5カ月サイクルも強気と想定されるため、その日柄の大半(恐らく9～13カ月)上昇基調が維持されよう。2016年11月を上昇の起点とすれば2017年8月で9カ月目。同年6月を起点とすれば2017年7月が13カ月目になる。従って今年は、日柄的に見て7～8月に重要な高値、10月前後に重要な安値のターゲット時間帯が出現する公算が高いと見る事が出来る。なお、2016年11月起点の相場が最も強気であった場合は、2017年12月～2018年1月に天井が形成される可能性がある点には一応留意しておきたい。もっとも、そのケースは「7」という年の習性を考えると、サブシナリオとしておくべきだろう。



【結論】

サイクル上の結論として現在は第二4年サイクルの最終サイクルとしての第四50週サイクル、仮に2016年11月安値起点に第三4年サイクルが始まっていれば、その中の最初の15.5カ月サイクルの天井に向けて上昇中と見る事が出来る。どちらの場合でも日柄的には8～10月のどこかで天井が出現すると見るのが妥当。トップアウト後は「7」の年の習性として「激しく短い急落＝20～30%の下落を数日間、あるいは一日で発生させる」可能性が高い。年を通じて「7」の年での楽観は禁物である。

戦略としては8月の高値にはいったん全ポジションを外す。11月の底値からの上昇はまだ23%でやや不足気味だが(通常30～60%上昇していれば、非常に高い確率で大幅調整が入る)、日柄がもう残り少ない。ポジションを保持しているならば過熱を待つか、サポートのブレイクで閉じる。ポジションがないのであれば、次の投資チャンスである10～11月の急落を待つのがベターだ。

なお、7月18日付の商品版投資日報ではセンチティックス分析もしてみた。ご興味の方はそちらもご覧戴きたい。

ザ・テクニカル

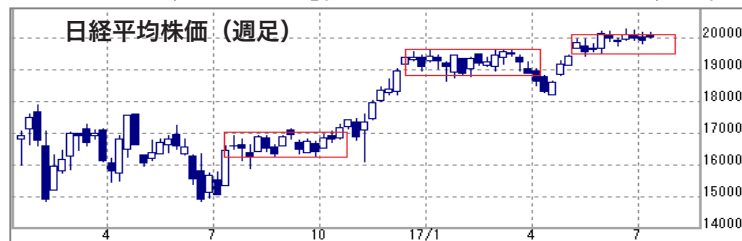
間もなく上放れか

日経平均株価、先週の高値は20,200、安値は20,023。全く動かなくなった。先週のチャートにも記したが、レクタングル系の調整が依然として続いている。先週のコメント「振り返れば昨年末、1万9千円台まで上伸した後、やはり12週間程停滞した。そしてこの時は保合いを下放れほぼ5週間下げ、4月17日にボトムを付けた。昨年8～9月はその逆。今回は4週ほど上昇してから保合いに入った。この1年間の相場はこういった特性を持つ波動構成なのかもしれない。ただ前回も述べた如く、この保合いは上放れを観ている」。

このレクタングルも週足で10本数えた。昨年8～9月の保合いは上放れ、今年3月までの調整は下抜け。交互の法則が適用されるなら、次は上放れと見るのが自然。そこで2015年6月に付けた高値更新が見えてくる。その時、「日経平均は1996年以来21年ぶりの高値を更新」といったニュースが報じられることであろう。今の処、これを信じて疑わない。

このシナリオが崩れるとすれば4月17日以降の上昇過程で生じたギャップを次々埋めて来たときである。最初のギャップ

は4月21～24日の週間ギャップ(18,648でマド埋め)、次は5月2～8日。このマドの下限19,464は5月18日ザラバで埋められたものの、週の引け値では維持された。最低限、このマドを週の引け値で埋められるまでは買いで攻めていきたい。少なくとも週間足でこのレクタングルを上回れば4～8週の上昇トレンドが形成されると見る。その時には「96年以来の高値」が出現すると見る。先週の安値を更新しなければ、現在後半のハーフPCの上昇期に入っていることを示す。これまでのコメントを引き継ぐ「間もなくこの(前半のハーフ)サイクルが終了する時間帯である…次の目標22,750までもっていく可能性を秘めている。上述の一段上げ、二段上げと値幅を等比級数的に伸ばせば三段上げでは22,890となる」。ちなみに96年の高値は22,750。



今週の押し

やはりダイバージェンス

上がるは株式ばかりなりー。米国株式市場は「6月の米消費者物価指数と小売売上高が市場予想を下回ったことを背景に、低金利が長期化すると楽観が広がった」(ブルームバーグ)のために先週末14日に続伸。史上最高値を更新した。ただ、この材料はあくまで動くための方便に過ぎない。どんなファンダメンタル的な好材料が出ようとも、下がる時は下がるもの。それを我々は「根拠なき熱狂」という言葉とその後の相場展開で体感している。同じことは「動かぬ時は動かぬ」という言葉でも言い表せるのではない。そう、ユーロドル相場のことだ。

先週の当欄ではこう述べた「…相場は2015～16年高値を結んだトレンドラインを突破出来ず、改めて非常に強力な上値抵抗である事は判った。恐らく近日中に突破すると思われるが、それは今ではない。何故なら買いの日柄は既に満ちかけているからだ」。今週は1月3日の安値から28週目に突入。先週の引

け値で相場は週足ベースでこのラインを突破したが、日足ベースでは問題が生じている。先ず心理的抵抗帯である1.1500を、先週の相場は結局上回る事が出来なかった。次に12日に1.1489まで上昇して年初来高値を更新したが、この時15日スローストキャスティクスは6月末から7月頭の水準を上回ることが出来なかった(弱気オシレーターダイバージェンス)。最後にチャートパターンは5月23日の1.1266をポイント1として、12日高値で「ロルッソー5ポイントリバーサル」の5ポイント目をつけた公算が非常に高くなっている。従って早くても今週、遅くとも来週までに相場は反落を開始するのではない。よって今週も1.1500以上の引け値にストップロスを入れて売り参入を推奨していきたい。ちなみに、先週の高値が目先の天井であった場合は先週の見通しが適用される。即ち(天井から)通常はボトムまで2～5週間の下落が想定される。早くても今週、遅くとも8月第1週までに1.1500、オーバーシュートで1.1000までの下落があるのではない。そこは恐らく格好の買い場になるものと予測する。恐らく、それは8月ごろになるのではない。

高く仕入れて安値で投げる投資家から脱却してアクティブブシニアになろう！

四半世紀以上、投資の最前線で活躍してきた「プロ中のプロ」が語る現在の株式市場とは

- ◎マイナス金利時代に株を持ち続けて成功する秘訣を解き明かす
- ◎10倍になる株など豊富な実例で銘柄発掘の心得を公開！
- ◎株式投資の実践編として〈有望銘柄掲載〉！



株で資産を蓄える

～バフェットに学ぶ失敗しない長期株式投資の法則～

S・アダチ&カンパニー
代表取締役社長

足立 真一 著

発行：開拓社 定価：1,296円(税込み)



今週の相場風林語録

誰もがじっとしておれないときの危険【3】

われわれは、バブル最盛期に、誰もがじっとしておれなくなって、株や土地、ゴルフ会員権、絵画等の投機に走るのを見た。

今週の**九星★波動**

南雲 紫蘭

不穏な動きに注意

「日銀も長期金利上昇を放置するのではないか」という市場参加者の不安は、日銀の長期金利をゼロ近辺に据え置いたために無制限買い入れを行ったことで解消されました。

同時に、日銀と米欧中央銀行のスタンスの差も明確になりました。つまり引き締めに動き始めるだろうECBと、すでに引き締めがあり、さらにテーパリングを強めていくであろうFRBとの差です。円安も一気に加速し、114円台後半に入ろうかという勢いです。相場の中心であったユーロドルはいったん相場の中心から外れ、レンジ相場の色彩を見せていますが、今年後半最大のテーマであるユーロ>ドル>円という相場展開に変化はないと存じます。

さて、7月から月盤は《三碧木星》に入った九星高下伝も、現在のところ《三碧木星》らしいドル上昇、株高となっています。大きく年足でも年中央の反転が期待されていますので、その意

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (403)

中原 駿

上野の当時の銀行の会計ルールを逆手に取っていた戦略は、皮肉なことに上野のポジションがアゲインスト — つまり負けている間はうまく利益を上げていた。

つまり長期債が下がり、短期債も値下がりしているうちは、時価会計なくてよい長期債の値下がりには全く損益に影響せず、短期債の値下げだけ利益を計上出来ていた。はるかに大きい長期債の下落は影響しなかったから、問題なかったのだ。

実際に利益に出ていたのは、日々計上する長期金利のクーポンと日々調達する短期金利の差益、さらに短期債券の値下がり益であった。上野は、こうした差益で部下が作ってしまった損失の穴埋めを少しずつ行った。

第六感の 1年サイクル上昇期



テクニカルアナリスト 葛城 北斗

ユーロドルはこの2週間で勝負処

ドル円相場は7月11日、114.49の高値を付け、当初の目標であった5月の高値114.36を僅かに更新した。前回次の通り述べた「何度か利食いも入っているが、買い直しも効いている。7～11週サブサイクルの上昇期はまだ継続されると見る。今週は4週目。少なくとも5～7週目まで、上昇トレンドが継続されると観ている。これが実現されれば、5月高値更新は容易であろう」。

高値を付けた後112円台まで調整が入り、ダブルトップが意識された格好。しかしこの調整が38～50%押しに留まれば、依然として強気を維持し、ダブルトップは単なる上昇過程に置ける中段保合いの高値に過ぎない。さらに押しが23～38%訂正内(113.16～112.34)であれば、現行サブサイクル内でさらに高値を目指す可能性を高める。このケースでの目標値は115円台。

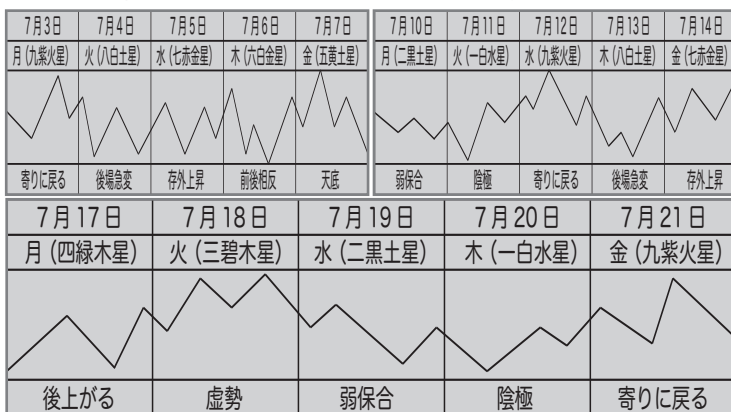
7～11週サブサイクルは今週は5週目に入る。先週の高値は4週につけた。通常の強気型であれば5～7週目で高値を付けるが、超強気型であれば、8～10週の上昇もあり得る。

週間ベース、6週移動平均(現在112)が維持されている限りは強気を継続したい。週の引け値で下回ればサブサイクルがトップを付けたと考えざるを得ない。そのケースでは7～11週目(8月中)にボトムを付けるだろう。それでも1年サイクルの上昇期は続くとする。従ってその押し目も買いだ。

味では押し目買いはまだ有効でしょう。

しかしながら《三碧木星》は「一気に加速して急落する」、つまり虚勢となりがちなことは注意が必要です。

特に米株に不穏な値動きが観察されたら要注意でしょう。



利益相当で穴埋めされる部下のトレード損失は、それでも不思議な損益を上野の銀行のポジションに与えていた。上野の持っているポジションが計上する利益と、ほぼそれと同額の損失が同時に生まれていた。もちろん、上野は慎重に日々の損失をバランスしていた。ある日はトレードの損失が金利の利益を上回らせるという見せ方もすれば、金利の利益だけが計上される日もあった。特に「フィギュアの日」とされる米国の主要統計や要人発言で相場が動いた場合にトレーディング勘定から損失を多めに出した。一方、相場が動かないときには金利の利益をしっかりと出し、日々の利益が極端にフラット(変化がない)であることをうまく偽装していた。つまりいかにも上手い上司が下手な部下のトレードをカバーしているように見せた。

実際、日本の有能な上司でなくとも、金利の勘定では勝っていてもトレーディングで負けるのは、デフォルト(典型的なパターン)といってもよかったので、疑う人間も少なかったのだ。

1年サイクルの天井目標値は120.23±2.38。タイムターゲットは10～12月を予定している。

一方、ユーロドルはどうか。先週は2015年、16年の高値を結んだラインまで上伸したものの、阻まれ、調整に入っている。上抜けると底練り脱出、そこから本格的な上昇トレンドが始まると見ているが、今後2週以内にこの上値抵抗を突破しない限り、調整が長引き、1.1000近辺までの落とされる可能性が浮上する。今週以降のチャレンジを見極めたい。ユーロ最強、円最弱ではユーロ円の上昇が際立つ。前回次の通り述べた「ユーロドルが1.15～1.16を超えてくれば底練り脱出。数年間の上昇が始まろう。少なくとも1.30以上はある。ユーロ円は150円以上が目標となる」。ユーロドルの調整が終わればまたこの動きが復活するだろう。



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第48回】日経平均株価のサイクルについて（7）

繰り返し記述しますが、サイクルはより小さなサイクルで2分割されるか、3分割されるのが基本です。今回は8.33年サイクルが2分割されたパターンについてお話ししました。

では、3分割されていた場合はどうでしょう。その場合、33ヵ月サイクル3つで構成される事になります。更にこのサイクルは2分割、もしくは3分割される訳ですが、その場合、16ヵ月サイクル2つ、11ヵ月サイクル3つに分割されます。今回はこちらのサイクル位相の可能性について考えていきます。

実は、このサイクル位相の可能性を示唆する安値が4月17日に出現しています。現行相場の高値は昨年6月24日の安値ですが、ここから4月安値まで週足では43週でした。11ヵ月サイクルを週足に直すと、37～55週のレンジを持つ46週サイクル。つまり4月安値は8.33年サイクルが3分割され、更に3分割された相場の第1サイクル終了場面という事になります。従って今週は第2（46週）サイクルの13週目。日柄はまだ半分にも満たないので、強気論者はこちらの見方を重用するかも知れません。しかし、話はそう単純ではないのです。

7月は昨年6月安値から13ヵ月目。この間、押しらしい押しは存在しませんでした。もし33ヵ月サイクルが2分割されていた場合、年初来高値を更新した6月（起点から1年）は16ヵ月サイクルの天井形成場面であった可能性があります。

長期サイクルの天井からボトムまでの期間がごく短期で終了するというケースは稀で、少なくとも2～3ヵ月はかかります。そうすると昨年6月から現在までの上昇期間は日柄的に限界が来ていると解釈する事ができるのです。そして、目先の相場が46週、16ヵ月のどちらのサイクルで構成されているかを図る上で、我々は日柄を更に細かく見ていく必要があります。



そして27日には太陽・火星コンジャンクション（0度）が発生する。これはメリマンCDや各種MMAレポート等で最近採り上げられているが前後6週間の時間帯で株式相場の高値と合致しやすい。これは前回のコンジャンクションが2015年6月14～15日に発生し、その際日経平均は翌週に高値をつけて下落したものの、NYダウはこの天体位相を挟んで高値と2番天井をつけたからだ（週足を見ると下降直前のジェットコースターによく似ている）。従って株式はもう既に高値をつけたかも知れない。もう1つ個人的に気になるのは、7月28日～8月7日にかけて太陽中心のホロスコープで見た射手座内に水星が入居する（ヘリオ射手座ファクター）。これはユーロや金相場の大きな上下変動の特異日であり、急騰の場合はファクター開始日から4営業日前までに大きな下落がある事が多いとメリマン氏は指摘している。存外、ユーロも金もこの時間帯まで下降局面が続くかもしれない。その場合、良い買い場になるのではないかと。引用が長くなったが、基本星回りの観点ではここで挙げた時間帯が相場の節目になりやすい。挙げていないのは米国時間17日の火星・天王星スクエアと18日の金星・木星ライン（120度）か。

メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

7月20日が今週の注目点

太陽・冥王星オポジション（180度）が形成されたのが7月10日。この日、NY金とNY原油が週の安値をつけた。その翌日、日経平均株価が週の高値をつけている。先週も指摘したが、6月25日～7月20日までの間、太陽、火星、木星、天王星、冥王星はそれぞれカーディナルサイン（牡羊座、蟹座、天秤座、山羊座）に入居し、相互に広義のスクエア（90度）即ちグランドクロスの状態にある。この期間中は上下に大きく振れる可能性をメリマン氏は週刊レポートの中で指摘。今週はMMAサイクルズレポートが発行されるので恐らく検証が行われるだろう。

グランドクロスに関しては先週こう述べている「…火星は7月20日に蟹座から獅子座にサインチェンジする。…恐らく次の節目を迎える時間帯は7月20日からの1週間前後ではないかと筆者は見る」。更にこの天体位相後の展開についてはこう述べた「22日（日本時間では23日）に太陽も獅子座にサインチェンジ。23日は新月。24日には金星・土星オポジション（180度）。

WEBサイトより一足早く、1週間分まとめ読み！！

今週のアストロロジー info

- 7月17日（月） 海外市場原油に注意
- 7月18日（火） 原油反転は加速場面
- 7月19日（水） 週初め転換した市場の反動注意
- 7月20日（木） 9月6日満月まで自然災害、テロ、戦争の脅威増幅
- 7月21日（金） キーワードは予想外、突発的、革新技術の発明
- 7月22日（土） 相場とは人生同様、思うように行かないことが多い
- 7月23日（日） 相場実践、千日の「鍛」、万日の「練」

ラジオNIKKEI メリマン氏最新インタビューCD

年後半の注目点となるか？ 8月の皆既日食

メリマン・スペシャルCD
メリマン2017後半大予測！

出演：レイモンド・メリマン 解説：林知久（投資日報社）

緊急発売

サイクル、テクニカル、そしてアストロロジーで種々の相場を分析予測し、その的中率の高さから世界中にフォロワーを持つMMA（メリマン・マーケット・アナリスト）主宰、レイモンド・メリマン氏。そのメリマン氏に、ラジオNIKKEI社は毎年2回、彼が年末に上梓する年間予測本「フォーキャスト」執筆直後の12月と、発行後半年経過した6月に電話取材を敢行し、それをもとにした音声コンテンツを製作されています。相場以外の話題といえば、やはりトランプ大統領の今後の動向になるのでしょうか。彼は1946年6月14日、月食（太陽と月を結ぶ直線上に地球が入り込む時間）の時に生まれています。これに加え、彼の出生図からは独創的、カリスマ性のある、名声も悪名もどちらも獲得出来るキャラクターである、とメリマン氏は分析しました。氏は、混迷の大統領選でトランプ氏が勝利する可能性があるという以前から指摘していた少数派の人でした。今年8月21日、全米で皆既日食が起こります。これは全米に、大統領に、そして相場にどんな影響を与えるのでしょうか。恐らくこの前後の時間帯は直近の注目ポイントになるのではないかと考えます。もちろん、このようなアストロロジーの話だけでなく、サイクル、テクニカルの観点も加えた日米株式、通貨（ドル円、ユーロドル）、金、原油、穀物の見通しについてもお聞きします。アストロロジーに興味の無い方にも「フォーキャスト」のサブテキストとして、メリマン理論入門篇としてお聴きください。

製作：ラジオNIKKEI 価格：6,480円（税・送料込）

簡単・便利な『投資日報オンラインショッピング』もご利用ください。

お問合わせ・投資日報出版（株） <http://www.toushinippou.co.jp/>
お申込みは：投資日報出版（株）
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町3-12-11 GRANDE 人形町6F 電話：03-3669-0278 FAX：03-3668-4444



ザ・グレートリセットとは？

星を読む。サイクルを読む。市場を読む。 Feel the star. Feel the cycle. Feel the market.

フォーキャスト2017

アストロロジーとサイクルで 2017年の相場を読み解く究極の書

レイモンド・メリマン 著 秋山日播著・投資日報編集部 訳 投資日報出版発行 8100円（税込・送料別）

簡単・便利な『投資日報オンラインショッピング』もご利用ください。

お問合わせ・投資日報出版（株） <http://www.toushinippou.co.jp/>
お申込みは：投資日報出版（株）
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町3-12-11 GRANDE 人形町6F 電話：03-3669-0278 FAX：03-3668-4444